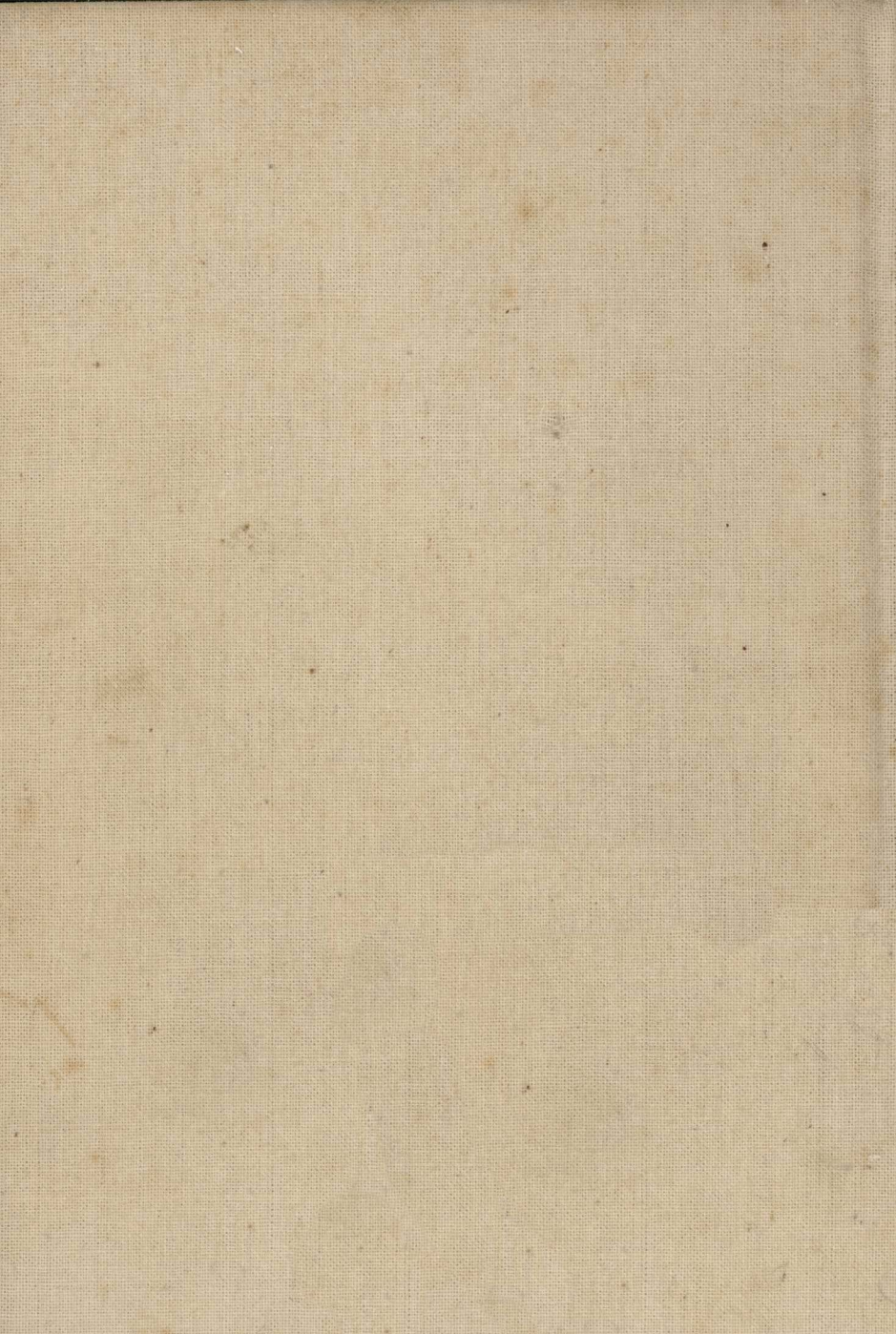




の印象

泉八雲作品集 1

河出書房新社

小泉八雲作品集 1

——日本の印象——

一九七七年六月十月初版

訳者 森亮／平川祐弘／仙北谷晃一／酒本雅之／奥田裕子

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

電話 三五五―五三一―

振替 東京〇―一〇八〇二

印刷 株式会社亨有堂印刷所

製本 加藤製本株式会社

定価は函・帯にあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

東洋の土を踏んだ日	7
盆踊り	38
神々の国の首都	58
英語教師の日記から	94
ある日本の庭で	151
八重垣神社	195
加賀の潜戸	211

美保関

233

日本海の岸辺で

248

生と死

断章

271

戦後に

294

解説

森亮

310

装帧 辻村益朗

小泉八雲作品集 1

——日本の印象——

東洋の土を踏んだ日

「ぜひとも早い機会に、第一印象を書き留めておいたらいいい」こう言ってくれたのは、来日後ほどなく会うことを得た、ある親切なイギリスの教授であった。「何しろ、最初の印象なぞ、たちまちに消えてしまう。しかも一度消えたら最後、二度と戻ってきはしない。今後この国で色んな不思議な経験をすることになるだろうが、この初めての印象ほど魅力に富んだものはない」。今、私は、当時の走り書きをもとに、その第一印象の数々を再生しようと努めているのだが、なるほどこれは、魅力もさることながら、逃げ足の早さは到底その比ではないことを思い知らされた。当時の記憶の中から、何ものかが雲のように消えてしまった——しかも二度と思い起こすすべもない。是が非でも守りたいと心には誓いながら、私は好意に充ちたその忠告をあだににしてしまった。あの日本に着きたての何週間かは、どう考えても家の中に引き籠って物を書く気になれなかった。何もかも珍しい日本の都市の、陽光に浸された町並みには、見たり聞いたり感じたりするものが、まだまだ沢山あったのだから。そ

それはそうと、あの初めてのころの経験からものはや失われてしまった印象を、すべてよみがえらせることが仮りにできたにしても、今度はそれを言葉で表わし、文字に定着できるかどうかは怪しいものだ。初めて感じた日本の魅力の捉え難さと散じ易さは、さながら芳^{かぐみ}しい香のようだ。

初めて俤なるものに乗って、横浜の外人居留地から日本の町へ繰り出したのが、日本の魅惑の始まりだった。思い出せる限りのことを、これから書きつけてみることにする。

一

初めて日本の町を旅する、甘美な驚きの感情——何しろ、俤屋にはいっさい言葉が通じない、見るもの、聞くもの、新鮮で、いいようもなく愉しいのだから、どこでもかまわない、とにかく連れて行ってくれというのさえ、身ぶり手ぶり、それも狂ったような身ぶり手ぶりで伝える他はない——その驚きの感情に混って、やっと実感が湧いてくる。今こそ、自分は東洋に——色々と本でも読み、長いこと夢みてもいたのだが、これまではまるで未知の国だったということが、この眼でようやく確かめられたその極東の国にいる……。この当たり前といえは当たり前の事実を、初めて心の奥底に実感するさえ、一種ロマンチックな気分が伴なうのに、私の場合、この実感が名状し難い神々しいものに変容したのは、その日のこの世ならぬ美しさによるのであった。朝の大気には言い知れぬ魅力がある。その大気の冷たさは日本の春特有のもので、雪におおわれた富士の頂から波のように寄せてくる風のせいだった。魅力と言ったのも、何かはつきりと目に見える色調によるのではなく、いかにも柔かな

透明さによるのだろう——大気全体が、こころもち青味を帯びて、異常なほど澄み渡っている。そのためどんなに遠くにあるものも、驚くほどくっきりと焦点が定まって見えてくる。日射しは暖かに快く、人力車は、世にこれほどにこぢんまりと寛げる乗物があるかと思う。わらじばきの俵屋のかぶっている白いきのこのような笠が上下に揺れて、その笠越しに見はるかす町並みの魅力は、これまた見飽きるということがない。

小さな妖精の国——人も物も、みな、小さく風変わりで神秘をたたえている。青い屋根の下の家も小さく、青いのれんを下げた店も小さく、青い着物を着て笑っている人々も小さいのだった。幻想を破るものといえば、時たま通り過ぎる背の高い外国人と、愚かにも英語などで書いてある若干の店の看板だけである。とはいえ、このような不調和もただ現実感を強めるばかりで、この小さな面白い街の魅力を大幅に損なうことなどあり得ない。

俵の上から見下ろすと、目の届く限り、幟のぼりがはためき、濃紺ののれんが揺れ、どれにもみな日本の文字や漢字が書いてあるので、美しい神秘の感を与えるが、奇妙にごたごたした愉しい混沌というのが、何といっても偽らぬ最初の印象である。造りにも飾りにもすぐにそれと認められるような法則がない。どの建物もとりのりの一風変った愛らしさを持っているようで、一軒として同じ家がなく、それがみな途方もなく目新しい。しかし、その界限に俵を乗り入れて一時間もすると、徐々に目は、家の造り方に何かしら共通の様式があることをおぼろげながら認め始める。これら、奇妙な破風のついた、木造の、低い軽そうな店は、大方何も塗っていない生地の儘で、一階はすっかり往来から見通しになっいて、薄い細長い屋根が店先から日除けのような勾配を作って、障子を閉め切った二階のかわ

いい露台に続いている。路面よりかなり高い床には、畳が敷いてあり、屋号や商品名を記した文字は、のれんにゆらめいているのも、金色や漆塗りの看板にかすかに光っているのも、一様に上から下に垂直に並んでいる。一番多い着物の色は濃紺だが、その同じ色が店ののれんでも幅を利かせているのが分る。もっとも、のれんでは、水色や白や赤など他の色もちらほら見当たらずに紺ではない（ただし、緑と黄の系統だけはない）。さらにまた、職人の着ているものにも、店ののれんと同じ、不思議な文字が書かれているのに気づく。これほどの妙趣は、どんな唐草模様をもってしても出すことができないだろう。装飾の目的にかなうべく幾分形を変えて書かれたこれらの文字には、意味を持たない意匠にはとうてい見られない生き生きとした均斉がある。職人の法被の背に——紺地に白く——遠くからでも楽に読めるように、大きく文字が染め抜かれていると（それを着ている人が、ある組の一員だとかある会社の使用人だという意味である）、粗末な安物の衣裳も何か絢爛たるものに見えてくる。

なおも解き得ぬ謎に頭をひねりながら進んでゆくと、やがて天啓のように閃くものがある。これらの街のすばらしい絵のような美しさは、その大半が、他でもない、これらの文字——門柱や障子・ふすまの類まで、あらゆるものを白、黒、青、金色に彩っている漢字と日本の文字の汨濫に由来するのだと思い当たる。そして一瞬、それら魔術のような文字を英字に置き換えてみたらという想像が湧くかも知れない。だがこれは考えてみただけでも、多少とも審美感情を有するほどの人なら、思わず衝撃に身ぶるいを禁じ得ない妄想だろう。そして、現に私がそうだったように、「日本ローマ学会」の強硬な反対者になるだろう——この会は、日本語を書くのに英字を用いることにしようという、醜惡きわる実利一辺倒の目的のために創立された会なのである。

二

表意文字が日本人の頭脳の中に作り出す印象と、音声の生氣に乏しい漫然たる符号に過ぎない、一箇ないしは幾つかの文字が西洋人の頭脳の中に生み出す印象とは、格段の開きがある。日本人の頭脳にとつて、表意文字は、生命感にあふれる一幅の絵なのだ。それは生きて、物をいい、身ぶりまでする。そして日本の街は、いたるところに、こうした生きた文字を充満させているのだ——その様々な形が、街を行く人の目に呼びかけ、色々な語句が、人間の顔なみに、にっこりと笑いかけたり、洪面を作ったりする。

生命なき符号に等しい、われわれ西洋の文字に比べて、これらの文字がいかなるものであるかを理解できるのは、この極東の国で暮らした経験のある人でなければならぬ。日本や支那から輸入された書物の活字を眺めてみても、同じ文字を碑文や彫刻やごく卑近な広告用に幾分形を変えて書いた際の美しさに思い至ることはないからだ。書く人というか、意匠化する人の幻想の枷かせとなるような、きびしい約束事などは何もない。一人一人の芸術家が、自分の書く文字は他の誰のよりも美しくあれとの願いをこめて誠心誠意努力を傾けてきた。代々の芸術家たちが太古の昔から同じように競い合いつつ、營々と励んできて、撓なみない努力と研究が何世紀にもわたって蓄積された結果、原始的な象形文字ないしは表意文字が、言語に絶する美しいものへと進化してきたのである。筆の運びとしては、ほんの何筆かで終ってしまうが、その一筆一筆に、優美、均整、線の微妙さに関して、端倪すべからざ

る秘法があつて、それがあるがために文字は實際生あるもののように見え、書家もまた、運筆の電光石火の瞬間にさえ、その文字全体の、頭から尾に至る理想の形を、筆一本に賭けて模作してきたのである。しかしその筆づかいの技法がすべてではない。一点一画の運筆が連綿と続いてゆく技法こそ、魅惑の源であつて、これには日本人自身も感歎の声を挙げるものがしばしばである。實際、日本の文字の持っている、ふしぎに人間的で、生氣潑刺とした、秘伝的な一面を考へるなら、昔、書の達人の書いた文字が化身して、扁額から舞い下り、人間と言葉を交わしたというがごとき、書道にまつわる数々の奇談の類もあえて驚くに当たらない。

三

私が雇つた俵屋は、自分のことを「チャ」と呼ぶ。白い帽子は、途方もなく大きなきのこの笠のよう、紺の短かい上着は袖が広く、同じく紺のもも引きは「タイツ」のように体にぴったり合つて足首まで達し、素足にはいかにも軽そうなわらじを棕櫚繩の緒でくくりつけている。この俵屋は、車夫仲間に通ずる、忍耐と辛抱の能力と、いつの間にか客の心につけ入ってくる才能とを、疑いもなく一身に兼ね具えている。私が法定料金以上の額を支払うことになったのも、俵屋がこの才能をすでに發揮した証拠である。くれぐれも用心するように言われていたのだが、いけなかった。馬の代わりに人間が、かし棒の間に身を入れて駆けてゆく——すぐ目の前で、何時間でも疲れを知らぬげにひょこひょこ跳ね続ける——この初めての経験だけでも憐憫の情を催すに十分だった。しかも人並みに希

望も思い出も情操も分別もありながら、かじ棒の間に身を入れて駆けてゆく馬ならぬこの男が、たまにたまともやさしい笑顔を作ったり、些細なこちらの好意に対しても底なしの感謝を見せる才能を持っていたりすると、この憐憫は同情に変わり、つい我が身はどうなってもというような途方もない衝動に駆られてしまう。全身汗みずくになっているその姿もこの気持の一因になっていると思う。こんなに汗をかいたら、動悸もひどかるう、筋もつれるだろう、それのみか、悪寒や充血や肋膜炎にもなりかねないと思ってしまうからである。チャの着ているものは、汗びっしょりになっている。俵屋は、小さな空色の手拭で顔の汗を拭う。竹の小枝に雀の柄を白く染め抜いたこの手拭を、チャは走る時手首に巻きつけている。

しかしながら、チャの中で私が心惹かれたものを——この場合チャは車夫としてでなく、人間として考えられている——私は、この玩具のように小さな街を走って行くうちに、こちらに向けられるおびたしい人々の顔の中に、次々と発見することができるようになった。おそらく、この日の朝がことのほか愉しく感じられたのは、人々のまなざしが異常なほどやさしく思われたせいであろう。誰もが珍しそうに眺めるが、その視線に敵意はおろか、不快なものは何もない。大抵は目が、にっこりとあるいはかすかに笑っている。こうしたやさしさを含んだ、好奇の目と微笑がもたらす究極の結果は、異国の旅行者に、思わず知らずお伽の国を思わせるのである。こう言えば、陳腐に過ぎて、又かと不快に思われる人もあるに違いない。日本の土を踏んだ日の印象を語るとなると、みな、申し合わせたように、この国をお伽の国、そこに住む人をお伽の国の人々と呼ぶ。しかし、もっと正確な表現が不

可能に近いことをまず書こうとすると、期せずしてその文句が同じになってしまふのは、自然の理というものである。すべてがわれわれのところよりも、こぢんまりと優雅にできている世界、——小柄で、見るもやさしそうな人々が、幸福を祈るがごとく、そろって微笑みかけてくる世界——あらゆる動きがゆったりと穏やかで、声をひそめて語る世界——土地も人も空も、これまでよそで見て知っていたとは似ても似つかぬ世界——そんな世界にいきなり身を置くとき、イギリスの昔話ではぐくまれた想像力の持主なら、昔見た妖精の国の夢がとうとう現実になったと思うのも無理はない。

四

旅行者がいきなり社会的變動の時期に足を踏み入れると——殊に封建時代から民主主義の時代へと變動する時期に遭遇すると、とかく過去の美しいものの崩壊と現在の新しいものの醜惡さを歎きがちである。この先日本で、新旧それぞれどんなものにお目にかかるかは分らないが、今日、この異国情緒溢れる街で見た限りでは、古いものと新しいものとが非常によく調和して、お互いに引き立て合っているかに見える。漢字と仮名の混った活字で印刷される新聞のために、世界の報道を送ってくる小さな白っぽい電柱が立ち並び、謎めいた東洋の經典の文句が貼ってあるすぐ脇に、とある茶亭の呼鈴の象牙の押しボタンが目についたりする。かと思うと、仏像を造る店のすぐ隣にアメリカのミシン商会の店があったり、わらじをこしらえる店と軒を並べて写真館があったりする——このような風景が、いっこう目に立つほどの不調和を感じさせない。西洋文明のもたらした新しいものが、どれもこれも、